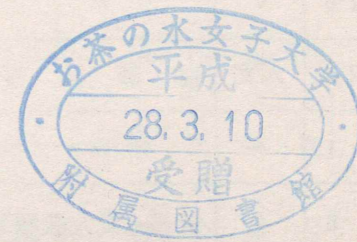


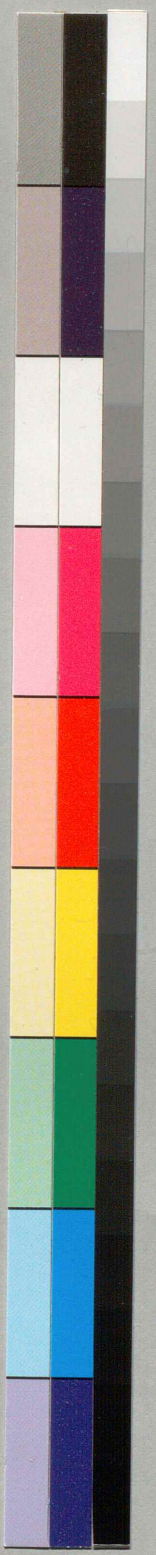
一般教育総合コース

近代から現代へ

昭和49年度



お茶の水女子大学



講義日程

(講義日時=土曜日第三・第四時限 10:20~12:00)

月	日	系列	担当講師	月	日	系列	担当講師
4	20	序説	中川教授	9	28	自然	稲葉教授
	27	社会	平野助教授	10	26	〃	〃
5	4	〃	〃	11	2	〃	吉松教授
	11	自然	伊藤厚助教授		9	〃	〃
	18	〃	〃		30	人文	柳教授
	25	人文	勝部教授	12	7	〃	〃
6	1	〃	〃		14	社会	安藤(東大教授)
	8	〃	三好(東大教授)	21	〃	〃	
	15	〃	〃	1	11	自然	団教授
	22	社会	坂野助教授		18	〃	〃
	29	〃	〃		25	社会	湯沢助教授
7	6		ゼミナール	2	1	〃	〃
9	14	人文	外山教授		15		ゼミナール
	21	〃	〃		22		試験

目次

「近代から現代へ」序説	中川 信	1頁
第一講 近代から現代へ—アメリカの場合	平野 孝	3頁
第二講 量子論の誕生	伊藤厚子	4頁
第三講 近代から現代へ —日本思想史における—	勝部真長	5頁
第四講 日本文学における近代から現代へ.....	三好行雄	7頁
第五講 日本の東アジア政策にみる 近代と現代	坂野潤治	8頁
第六講 抽象性と読者の問題	外山滋比古	9頁
第七講 現代数学の特色について.....	稲葉栄次	10頁
第八講 近代から現代への食生活の変遷	吉松藤子	11頁
第九講 近代より現代へ—絵画の場合—	柳宗玄	12頁
第十講 近代から現代へ(経済学)	安藤良男	13頁
第十一講 近代と現代の「自然」	団仁子	14頁
第十二講 婚姻観と離婚観の流れ	湯沢雅彦	15頁

総合コース目

近代から現代へ

柳・外山・勝部・三好（人文関係）

坂野・平野・湯沢・安藤（社会関係）

団・伊藤・稲葉・吉松（自然関係）

一般教育関係科目の各分野にわたる共通な一つの主題について、総合的に学ぶものである。

主として二年生対象

履修単位数：同一年度において4単位まで履修可能で、二年度までの計8単位が一般教育科目の基礎単位として数えられるが、一分野については4単位をこえてはならない。

セミナー：総合コースの成果をあげるため前・後期、各1～2回程度セミナーを行なう。

試験方法：学年度末に試験が行なわれるが、その際各担当講師から試験問題が示され、学生はそのなかから受験科目をきめる。三分野のうちいずれの分野の科目を受験することも自由であるが、一分野について二単位まで、全体で計4単位を取得限度としている。

一般教育総合コース「近代から現代へ」序説

一人の教官が一年を通じて講義を担当する通常の授業とは異なって、総合コースはある特定テーマのもとに各分野の教官がそれぞれの専門的立場から問題を取り上げるという独特な形態をとっている。学生諸君はこの一連の連続講義に出席することで、全体として首尾一貫し、完結した知識が得られるという安易な期待をいだかないでほしい。たしかに、2回ずつその専門的立場から問題を展開される各講師の講義によって、今日細分化する傾向にある学問をより広い視野のもとに総合する素材としての知識は諸君に与えられるであろう。この素材としての知識をもとに、それを比較・対象し、さらには批判を加える作業を通して、一つの全体像を築きあげるのが諸君の仕事である。この授業を、総合されたものを与えられるのではなく、自ら総合する能力を伸す契機として受け止めなければならない。そして前・後期一回ずつ予定されているセミナーに、諸君は自らの疑問、批判を提出し、出席の教官を含め全員で共に考え、問題を深めることで、この総合コースが単なる一方通行ではない、開かれた創造的学習の場となるのを期待したい。

かえりみれば、1956年に大学における一般教育での実験としてはじめられた本講座も今年で18回目を迎える。本コースが学生諸君にどのように受けとられているかを知り、今後の運営の反省資料とする目的で、昨年アンケートを行い、73年度受講者中100名、73年度以前受講者中70名、計170名に協力を求めた。その一項目、「総合コースは他の授業科目に比べてとくに意義があると思いますか」との設問に対して、次のような回答を得た。

意義があると思う	120人	73.2%
どちらともいえない	41人	25.0%
意義がないと思う	3人	1.8%
無回答	6人	

総合コースの運営の任にあたる一人として、この学生諸君の評価を心強く思うとともに、今回の調査を通じて寄せられた、批判・提言を検討し、本コースを一段と充実したものに、本学のすぐれた伝統のひとつとして誇りうるものにしたと念じている。そのためには、学生諸君にも、自ら考え総合する知的努力、セミナーへの積極的参加を開講に先立って重ねて期待したい。

ところで、今回のアンケートで、学生諸君の多くが、学問と現代社会との関わり、人類の未来といった問題に関心のあることが知られた。この調査実施と平行して、われわれは「近代から現代へ」というテーマのもとで本年度講義の準備をはじめていたが、これが学生諸君の関心と遠くへだたっていないのを知り喜んでいる。

20世紀も終りに近付こうとするとき、現代文明の行き過ぎが、人類の前途に対する不安・危惧の念を呼び覚ましている。人類の未来がどのようなかには簡単に予測しえないところである。しかし、どのような事態にも対応できるよう、まず現在われわれがどのような状況に置かれているかを、もっとも近い過去との対比によって明確にすることは決して無益ではあるまい。現代がどのような形で近代の継続であり、いかなる点で近代と断続しているかを、各講師の話を通して追求していこうではないか。

序説として、イギリスの歴史家、G・バラクラフの所説を簡単に紹介し、本年度の出発点としたい。

参考書

G・バラクラフ 「現代史序説」 中村英勝・妙子両氏訳 岩波書店

第一講 近代から現代へ—アメリカの場合

平野 孝

近代と現代をそれぞれどのように規定し、その転換期をどこに設定するかということは、歴史の研究者にとってその問題意識・歴史観にかかわる大切な問題である。もっとも一般的な解釈にしたがって、西洋史の「近代」を、資本主義的生産様式を経済的基盤とし、ブルジョア民主主義を政治形態とするいわゆる市民社会の時代と理解するならば、「現代」はそれに代って社会主義体制が初めて樹てられたロシア革命をもって始まるという見方がなり立つだろう。

では、一国の歴史に舞台を限定した場合、「近代」と「現代」はどのような形で発現しているだろうか。ここでは、アメリカの近代から現代への過渡期を1890年のフロンティア消滅から1929年大恐慌までの40年間と考え、二つの時代のもつ特性をできるだけ具体的に対比して論じることとする。

参考書

- 有賀 貞 『アメリカ政治史：1776～1971』
(福村出版, 1972)
- ビーアド 『新版アメリカ合衆国史』
(岩波書店, 1964)

第二講 量子論の誕生

伊藤厚子

19世紀後半までに力学や電磁気学の諸法則が発見され、理論体系が確立されていく一方で、それらの理論によっては全く説明出来ない現象が多数見出された。ここに、古典物理学の論理から離れて新しい理論、量子論が生れることになる。量子論は我々の日常の体験を超越しているために非常に理解しにくい。しかし、最近では量子効果は我々の日常の生活の中にも静かに取入れられ、それとは知らずに恩恵を受けている面が多い。量子論誕生のこと、古典論と量子論との根本的な相違について平明に解説し、生活の中での量子効果についても触れたい。

第三講 近代から現代へ

—日本思想史における—

勝部真一 長

日本思想史の上で、「現代」die Gegenwart がいつから始まるか、は学説の分れるところであるが、ここでは国際的には第1次世界大戦(1914~1919)と、国内的には関東大震災という出来事をもって、「近代」と「現代」とを区別するメルクスールとしたい。

政治史上にはいわゆる大正デモクラシーとよばれる思潮と、平民宰相と呼ばれた原敬によるわが国最初の政党内閣による政治があり、思想史の上では大正2年の「ニィチェ研究」(和辻哲郎)、3年の「三太郎の日記」(阿部次郎)、4年の「ゼレン・キエルケゴオル」(和辻)、7年「偶像再興」(和辻)、10年の「愛と認識との出発」(倉田百三)などは画期的な思想表現であったといえよう。他方堺利彦、高島素之らの「新社会」が大正4年に創刊され、河上肇らのマルキシズム研究もようやく活潑になっていた。

そして武者小路篤実は大正7年、「新しき村」を宮崎県に開設したりしている。吉野作造の「黎明会」、東京帝大の「新人会」の結成も大正7年である。普通選挙法案が国会を通ったのは大正14年で、昭和2年に最初の普選が行なわれた。

こうしてみるとこの時期こそは思想史における現代の胎動といってよいのではないか。このよきな観点から、日本思想史における「近代」から「現代」へを考案してゆきたい。

参考書

- Bertrand Russell : Problems of China
- 原敬日記
- 和辻哲郎全集(とくに「日本倫理思想史」「日本精神史研究」)
- 河上肇 「自叙伝」

- 夏目漱石「こゝろ」
- 森 鷗外「興津弥五右衛門の遺書」

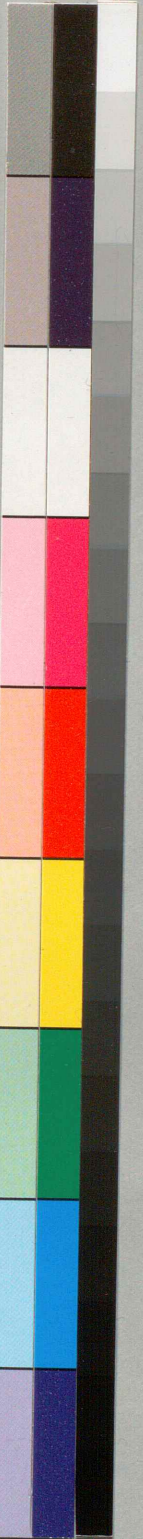
第四講 日本文学における「近代から現代へ」

三 好 行 雄

＜近代＞および＜現代＞という呼称は、日本文学史の時代区分として、概念規定がかならずしも明確ではない。しかし、ここでは通念にしたがって、大正末年代以降の一時期を、＜近代＞から＜現代＞への転形期とする。現象的には新感覚派の抬頭とプロレタリア文学運動の組織化がメルクマールである。講義の細部については、なお未定だが芥川龍之介の自裁などをも視野に入れながら、時代の動態を考察する予定である。

参 考 文 献

吉田 精 一 編『昭和文学史』至文堂
小田切 進 著『昭和文学の成立』勁草書房
（執筆草履）『藤村の生涯』三文川館
『藤村の生涯』三文川館
（執筆草履）『藤村の生涯』三文川館
（執筆草履）『藤村の生涯』三文川館



第五講 日本東アジア政策にみる近代と現代

著者 橋川文三

著者 坂野潤治

1904、5年の日露戦争を一応の区切りとして近代と現代を区別して、近代と現代の日本のアジア政策およびアジア意識の変化を検討したい。近現代の日本の対外問題は今日まで対欧米関係と対アジア関係の二重性であるが、この二重性そのものが、日清、日露両戦争を過渡期としてその前後において大きな変化を示している。日清戦争以前においては対欧米劣性が明らかでありながら、アジア特に中国に対する優越性は国力、軍事力の面でも、伝統文化という点でもはっきりしていなかった。それ故に対欧米劣性感がこれに加わることによってアジア連帯的な考え方は決して少なくなかった。これに反し日露戦争以後は対欧米劣性感が減少すると同時に、対中国軍事力の優越性がはっきりしてきた。このような状況下でも前時代の日中同文同種的なスローガンは繰り返されたが、そのもつ意味内容は前時代と大きくことになってきた。

参考文献

- 岡 義武 「国民的独立と国家理性」
(筑摩書房刊 近代日本思想史講座 第八巻)
- 橋川文三 「順逆の思想」 (勁草書房)
- 丸山真男 「陸羯南と国民主義」
(明治史料研究会編 民権論から国権論へ
御茶の水書房刊)

第六講 抽象性と読者の問題

著者 外山滋比古

著者 外山 滋比古

近代から現代への推移を、“現在である過去”と“過去になりつつある現在”の間においてとらえるのは難かしいかも知れない。むしろ“過去形の近代”と“完了形の現代”の間における対比の方が理解に便だと考えられる。こういう観点から言語、言語芸術を考えてみると、抽象性、難解性、イメージなどが、芸術特有の先見性を示すものとして目をひくトピックが浮び上がってくる。さらに、作者と作品の比重が前者から後者へ移りつつあること、コミュニケーションから読んで読者の自意識という、いまのところ一般には承認されていない問題に注目したい。

これらの考察に当たっては、東洋と西洋との巨視的比較が当然からんでくるであろう。

参考書

- ヴォリンゲル「抽象と感情移入」(草薙正夫訳) 岩波文庫
- リチャーズ「文芸批評の原理」(岩崎宗治訳) 八潮出版
- エンブソン「曖昧の七つの型」(星野・武子共訳) 思潮社
- 土居光知「文学序説」 岩波書店

第七講 現代数学の特色について

稲葉 栄次

古代から現代まで長期間にわたって発展しつづけた数学の分化と多様化は
いちじるしいのであるが、その発展の過程においてみられるいくつかのおも
な事例を説明してその歴史的意義を探究したい。そして現代の数学の特色を
一時代前の数学のそれとくらべることを試みる。

参 考 書

- 小堀 憲 数学史 朝倉書店
- 中村幸四郎 数学史 共立出版
- 矢野健太郎 数学の歩み 共立出版

第八講 近代から現代への食生活の変遷

吉松 藤子

ここでは近代を一応明治以降と設定する。
食生活は健康を維持するために重要であるばかりでなく、慰安的、社会的
な面にも関連を持つ。わが国の食生活の近代から現代への変遷を眺めると、
栄養学の進歩、食品工業の発達、調理学の台頭などを背景として大きな変化
が見られる。中でも第二次世界大戦後のそれには著しいものがある。これら
の変化は必ずしも歓迎すべきものばかりとは言い難い。この流れの変化を
栄養学、食品学、調理学の立場から検討し、将来の食生活の在り方を考えて
みたい。

参 考 書

- 渡辺 実編 日本食生活史 吉川弘文館
- 桜井 芳人編 コンビニエンスフーズ 柴田書店
- 細谷 憲政著 栄養学概論 第一出版
- 食生活研究会編 近藤正二博士講演記録 「児童の発育と食べ物」 食生活研究会

第九講 近代より現代へ—— 絵画の場合 ——

千 瀬 登 吉

柳 宗 玄

ルネッサンス以降の近代美術は、視角の対象としての現実界の客観的な観察を、不動の原理としていた。これは、近代の合理主義的精神を基盤にして

いるものである。しかし、問題を絵画に限ると、現実界にはこのような原理に則っている限り描写できないさまざまなものがある。例えば山の向こう側、種のある葡萄、尻尾を振っている犬など。視覚的でないもの、例えば風、音、さらにはさまざまな感情なども、直接には表現することができない。

二十世紀に入って、近代美術の原則は打破られ、絵画表現の可能性が大きく開拓された。

また、自然界の何かを再表現することを目的としなくても、抽象的に扱われた形や色の構成は、音楽すなわち抽象的な音の構成と同じく、それ自体が人間の感性に訴える力をもつことができる。かくて形や色は、自然界の束縛を離れてそれ自体の意味をもつようになった。

二十世紀に入ってからの芸術創造の新傾向は、実は先史時代や中世の美術あるいはアフリカや東洋の美術においてすでに早くから開拓されたものであるが、近代に対しては根源的な革命といえる。

第十講 近代から現代へ（経済学）

モ リ 國

安 藤 良 雄

「近代から現代へ」ということを経済学的にいうと、一応産業資本から金融資本の段階への推転、いかえれば帝国主義＝独占資本主義段階への発展の過程といえよう。

これらの問題については、理論的にも論ずることが多いが、今回は、主として日本の場合について具体的に論述することとしたい。すなわち、明治中期以降大正年代における日本資本主義の展開過程について述べることにするが、さらにいわゆる“国家独占資本主義”体制への展望の意味をふくめて昭和年代に及ぶつもりである。この間日本資本主義の変ぼう、かかえてきた諸問題についてもふれたい。

参 考 文 献

レーニン 「帝国主義論」 （岩波文庫版、青木文庫等に邦訳あり）

安藤良雄 「日本資本主義の歩み」 （講談社「現代新書」）

” 「現代日本経済史入門」 （日本評論社）

第十一講 近代と現代の " 自然 "

団 仁 子

昔の人間は、nature を恐しい、かなわないものとして尊重し、自分の自然に対する無力を補うために、神秘的な要素を自然の中から求めると同時に自然は命の基盤として、日常生活のすべてを供給するものであることを認め感謝し、自然と多面的な連帯感をもっていた。

ところがGalileo やNewton のころから、理性や客観性による考え方が広がるようになったことは近代の始まりといえよう。自然現象に対する理解が深まり、次第に自然の力を制御することが出来たら、そのこわさが減り、そして神秘性がなくなった。

その結果の一つとして、“母なる自然”と人間との間にへだたりが生じ、人が必要としたものの出所——つまり“資源”としての重要性が圧倒的に大きくなった。その資源は無限にないと指摘しはじめたのは（詩人を除けば）今世紀に入ってから。それは近代の一つの業績であったが、現代ではそれだけですむかどうかを生物学の立場から考えたい。

第十二講 婚姻観と離婚観の流れ

湯 沢 雍 彦

婚姻制度は、人類の長い歴史を通して、生活についての、性についての、ひいては人間性の根源についての、もっとも意図的・組織的かつ徹底した統制手段として機能してきた。婚姻を中心とした「家族という第一次集団」でほとんどすべての人は生まれ、育ち、そして死んできたからであり、なんらかのかたちで婚姻制度をもたなかった社会はない。

だが、婚姻についての規制・拘束・解消・理念などは、時代により、社会により、バリエーションはきわめて多様であって一率には論じられない。

ここでは近代に中心をおきながら、キリスト教社会、イスラム教社会の推移と対比しつつ、日本の婚姻観と離婚観の特質を歴史的に検討してみたい。

参 考 文 献

- ジュリスト増刊特集号「性——思想・制度・法」 有斐閣
- 神島二郎 「日本人の結婚観」 筑摩書房 昭39
- 川島武宣 「結婚」(岩波新書) 岩波書店 昭29
- 太田武男(編) 「現代の離婚問題」 有斐閣 昭46
- ア・ゲ・ハルチュフ・寺谷弘壬訳 「ソ連邦における結婚と離婚」
創元新社 昭42
- 湯沢雍彦(編) 「離婚」(現代のエスプリ81号) 至文堂 昭49

二十卷の雑誌と雑誌の二十卷

雑誌の巻

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。その特色は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

この雑誌は、その内容の豊富、その編集の周到、その印刷の精巧、その紙張の堅固、その価格の低廉、その発行の頻りに、その普及の速きに、その功利的でないところに、その特色がある。

